



東京農業大学
世田谷キャンパス 大学本部
大学院・応用生物科学部
生命科学部・地域環境科学部
国際食料情報学部
厚木キャンパス
大学院・農学部
北海道オホーツクキャンパス
大学院・生物産業学部

4月・7月・11月 発行
編集 東京農業大学学長室
〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
<http://www.nodai.ac.jp>

- ② 「研究室から」研究成果で水産業に貢献したい……
- ③ 農大貢献賞に堀田和彦教授……
- ③ 「活躍する卒業生」キテレツな人生を歩む……
- ③ 東京農大「ガストロノミー」始動……
- ④ 小川さんがボクシング国際大会で銀メダル……
- ④ オホーツク野球部 全日本大学選手権ベスト8……

SNSでも情報発信!
東京農大はソーシャルネットワークを通じて大学の情報をお届けしています

Twitter @nodaipr
Instagram tokyonodaipr

3キャンパスで「キャンパスツアー2021」開催



来て・見て・学ぶ——
コロナ禍による入構制限後、初の来場型イベント

夏のオープンキャンパス(以下、OC)を目前にして、ミニOCとなる「キャンパスツアー2021」が6月7日に世田谷・厚木・北海道オホーツクの3キャンパスで開催された。新型コロナウイルス感染症への対応で入構制限がされて以降、初めての来場型イベントとなった。

今回のキャンパスツアーは、コロナ対策を徹底した上で進化した。密集回避のため事前申込制とし、午前の部と午後の部それぞれ定員を設けて行われた。大学説明会をはじめ、研究室や施設見学をする「キャンパスツアー」や実際に授業を体験できる「模擬講義」、現役の東京農大生から学生生活のことが聞ける「トークブース」、最新の入試情報がかかる「入試ガイダンス」など、高校生の要望に沿ったさまざまなプログラムが用意された。約2年ぶりとなる来場型キャンパスツアーは、コロナ禍の緊張感がありつつも、真剣に話をする農大生と目を傾ける高校生

世田谷キャンパスのキャンパスツアーは6月20日、午前と午後に分けて各回定員500人で行われ、申し込み開始後、即満席に。来場者に研究室を案内するサポート学生の豊田さん(左)

トークブースで来場者と話すサポート学生たち(左)

厚木にある農学部のキャンパスツアーは6月27日に開催された。当日はあいにくの雨模様だったが、事前予約していた196人が来場した。

厚木キャンパスツアーの案内を行った。醸造科学科の見学ツアーを担当していた豊田実加さん(醸造科学科4年生)は、「私も高校生の頃に、農大生と話す機会を持ったことで受験勉強の意欲が高まったため、高校生たち

自由が回れる施設見学が好評

厚木にある農学部のキャンパスツアーは6月27日に開催された。当日はあいにくの雨模様だったが、事前予約していた196人が来場した。

北海道オホーツクキャンパスのキャンパスツアーも厚木と同日、6月27日に行われた。こちらは快晴。キャンパスツアーを6月に開催することは初めての試みだったが、網走の環境を少しでも早く知りたいという高校生から「キャンパスツアーからは、キャンパスや市街地を訪れ、学生が勉学に励む姿を見ることができ、受験へのモチベーションが上がった」と感想が語られた。

東京農大は新型コロナウイルス感染症拡大への対応策として6月21日、世田谷キャンパスに「農大PCRセンター」を開設した。株式会社エアー・バイオとの業務提携によって実現に至り、キャンパス内で1日500検体の検査が可能となった。

「農大PCRセンター」開設
1日500検体を検査可能——3時間で判定

現在、検査対象者は、世田谷・厚木・北海道オホーツクの3キャンパスの学生と教職員、OB・OGなど本学関係者、その他、地域の高齢者施設や団体となっている。学生の実習時や教職員の出張時、イベント開催時などにも陰性証明検査として活用していく予定。今後、大学関係者の安全・安心を確保し、感染者が大を防ぐ対策を講ずるためにも、このPCRセンターが1役を担うこと

なる。株式会社エアー・バイオの武山健一代表取締役は、「コロナ禍となり、学生活動など制限が多くなっていると思うが、PCR検査を安心材料として実習実験などに取り組んでほしい」と学生にエールを送る。

【2面に関連記事】
また、陽性判定の場合には、医師の紹介や保健所への相談も可能(医師から保健所対応する)。



東京農大世田谷キャンパスの最寄り駅となる小田急小田原線経堂駅に4月1日、「東京農業大学最寄駅」の名称が加わったII写真。

地域振興の創出に貢献していることなどの理由があり、東京農大の副駅名の掲出が決まった。地域とともに歩む大学として、農大ブランドのより一層の強化が期待される。

また、6月2日から沖縄の玄関口、那覇空港の3階出発ロビーに、東京農大の看板が掲出された。那覇空港の年間利用者数は2千万人を超え国内第6位であり、東京農



那覇空港の「東京農大」看板

研究室から

東京農業大学大学院
博士前期課程2年
水産増殖学研究室

松本 裕幸さん

そこにオホーツク海があったから。九州から遠い極寒の地にやってきて研究生活を続けている松本裕幸さんが、その目標に懸ける思いは熱い。漁業者へ、そして水産業へ貢献したいと考えながら活動する松本さんに話を聞いた。

九州出身の松本裕幸さんが、

遠く北海道オホーツクの東京農大で学ぼうと決めたのは、そこにオホーツク海があるから、だけあり、学部だけでは物足りない業が盛んである地に位置するこの大学で水産の勉強ができればとても面白いと考えました」と松本さんは語る。生まれ育った所とは全く環境の異なる、極寒の地で生活に慣れもあつた



孵化幼生を飼育する水槽を洗浄する松本さん

だ、その思いに到達するような成果は出せなかったので進学を選択しました」

大学院での研究を通して「ホッケイのエビの資源量が減少している理由はなぜなのかを、地球温暖化の観点から明らかにすること」を



水槽内を泳ぐホッケイエビ

目指している。「この研究を進めるうえで重要な活動が、ホッケイエビの飼育管理です。私の実験は主に生体を扱うので、実験対象種を健康な状態で飼育する必要があります。毎日、欠かさず給餌と水替えを行い、常に観察を続けます。それらを使って、飼育実験や、温度を操作した曝露実験や、組織切片の作成や、行動実験を行います。野生個体のサンプルが必要な場合は、能取湖に向いてサンプル採集をします」



エビたちの死に気が狂いそうだった

いつも前向きで精力的な松本さんだが、「一番辛かった。これは忘れられない」という学部時代の経験がある。ホッケイエビの飼育実験をしていた農大の水産室での出来事だ。「3年生の6月から孵化幼生の飼育を始めて、毎日(吹雪などの学校封鎖時を除いて)欠かさず飼育と観察を行いました。また、飼育水150リットル(灯油タンクで約8本分)ほどを毎日、

自家用車で臨海センターからキャンパスまで約15キロの距離を往復しながら運ぶことを続けました。夏に水槽内の空調が故障した際は、全個体を空調の利いた部屋に移動させて水温が上がるのを防ぎました。水槽内の水が突然、原因不明の白濁をしたときは、その夕方から明け方まで一晩、不眠不休で水替えしたりもしました。そこまでして飼育を続けて1年半ほど経ち、あと少しで繁殖までさせて完全養殖できそうになったところ

で、原因不明でエビたちが死にだしたので。辛さを通り越して、気が狂いそうでした」

「もうろん大変なこともあるかもいれませんが、自分自身、進学して現時点では後悔はしていません。あえて言うなら、進学を考えると、今やるべきことを真剣に考えて、すぐにでも行動に移すべきだと思えます」

「もうろん大変なこともあるかもいれませんが、自分自身、進学して現時点では後悔はしていません。あえて言うなら、進学を考えると、今やるべきことを真剣に考えて、すぐにでも行動に移すべきだと思えます」

北海道オホーツクキャンパスで職域接種始まる 学生1250人、教職員・家族1800人が接種予定

コロナワクチンの職域接種の新規受付が一時停止されるなどワクチン接種を進める動きに不安が残る中、北海道オホーツクキャンパスでは7月25日から職域接種が始まった。申し込みをした学生およそ1250人と、教職員やその家族など1800人の接種を予定している。



キャンパス内の体育館をワクチン接種の会場とし、学校医と保健室の看護師によって初日はおよそ330人が接種を受けた。江口学長は、「ワクチンに余剰が出た場合は、地域の方へ還元できるように網走市と調整していきたい」と話す。

新型コロナウイルスは、国から供給される「モデルナ社製」を使用。接種回数は2回で、8月上旬に2回目の接種を終える予定だ。



令和3年度 第1回オンライン教育懇談会

1400人がライブ配信視聴



挨拶をする江口学長(中央)

オンラインによる教育懇談会が7月3日に開催された。12時から開始した全体会では、林教育後援会長と江口学長の挨拶をはじめ、

5人の副学長から各キャンパスの状況が伝えられた。およそ1400人がユーチューブ(YouTube)によるライブ配信を視聴し、全体

会終了後は学部学科ごとのオンライン懇談会となり、学科教員との個別・集団ミーティングが行われた。

新型コロナウイルス感染拡大防止のために、昨年度から教育懇談会はオンラインへ切り替わっている。参加者からは、キャンパスでの開催を望む声も多く寄せられるが、オンライン開催の利点も大きい。

今回、神奈川県は豪雨に見舞われ小田急線が一部区間不通となり、教職員がキャンパスへ出勤できないというアクシデントが起きた。しかし、オンライン開催であったことから、無事に定刻通りに始めることができた。

コロナ収束まで、オンラインによる情報提供は続くと思われることから、東京農大では、参加者からのアンケート結果を反映して、よりクリアな映像や音声を届けられるよう配信方法の改善に努めていく方針だ。

農大貢献賞に堀田和彦教授

農業経営分野の第一人者

「東京農大貢献賞」(農大貢献賞)は、本学の名声を著しく高めることに貢献した教員を表彰するもので、本学創立125周年の2017年に始まりました。5年目となった今年は、農業経営分野の第一人者として本学の評価を高めてきた国際食料情報学部食料環境経済学部の堀田和彦教授が受賞。本稿では、その受賞者あじろをお届けします。



国際食料情報学部・食料環境経済学
堀田 和彦 教授

この度、栄えある農大貢献賞を拝受し、心より感謝申し上げます。わたしの研究領域は農業経営・経済学という社会科学分野になります。研究の内容を紹介する前に、少しばかり、10年前、私が東京農大に赴任した経緯についてお話しさせていただきます。私は東京農大に来る前、九州の大学で約20年教鞭をとっておりました。当時、私の専門である6次産業化の課題に関する調査だけでなく、学生・院生の卒論、修論の研究テーマに沿ってコマや野菜、山村の竹

林維持の調査など九州だけでなく、全国の様々な現場に足を運びました。その折、どの現場にも東京農大の卒業生が役場や農協、農業経営者、流通業者等として第一線で活躍しておられ、ななでこんなに農大関係者がいるんだ？と本当に不思議に感じておりました。このように、日本農業、食料の現場において第一線で活躍する卒業生を多く輩出する東京農大のすばらしさに魅かれ、その経験が本学に赴任するきっかけとなつていきます。

初代学長の横井時敬先生は大変有名な農業経営・経済学者でもあり、皆さんもよく御存知の「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」のお言葉にもあります。とおり、我々農業経営・経済学を専門とするものは、現場に何度も足を運び、現場から学び、それを整理・理論化し、少しでも現場に

返すことを基本的な研究スタイルとしております。農業農村の現場に付加価値を生み出す6次産業化の事業は、たとえば加工工業を考えた場合も、単純に生産したもの(規格外品等)を加工・販売すれば成立するのではなく、生産物の加工適正、農村での加工事業・広告・宣伝のあり方、消費者ニーズにマッチした商品作り、固定客の確保の仕方等、様々な問題を1つ1つ粘り強く解決していかなければ、地域に付加価値を生み出し、雇用を創出する持続的な6次産業化の実践的解は生まれません。この度、拝受いたしました6次産業化等に関する研究も、実は多くの農大の卒業生を含む現場の方々による実践的解をナレッジマネジメントの視点から整理・積み上げたものです。そう考えますと、本賞は農大の卒業生を含む、現場の方々より与えて頂いた知見をもとにしており、心より感謝申し上げます。



著書も多数

現在日本は多くの農山村が少子高齢化等を背景に、活力を失いつつあります。この問題はただ単に

農山村の問題にとどまらず、長らく多くの労働力や食料等、様々な資源を吸収して発展してきた都会、日本経済そのものの問題でもあるのです。豊かな農山村という土台の上に成り立っていた日本経済は今非常に不安定な状態にあると言っても過言ではありません。6次産業化をはじめとする様々な活力を生む仕組みによる農山村の再生こそ、日本そのものの持続的成長に不可欠であると考えております。今、東京農大の果たすべき役割は非常に大きいのではないのでしょうか。日本の農山村の活性化、日本経済の持続的成長のため、今後も微力ながら精進してまいります。

東京農大は今年度から本格的に、地域の「食」を核に、地域活性化への寄与を目指す「ガストロノミー」を推進していく。自然・空間・伝統・歴史など、その地域で育まれてきた風土の魅力から、新たな食文化を創造する壮大なプロジェクトだ。北は北海道から南は沖縄まで、現在136の企業や自治体・団体等と包括連携協定を締結している本学だからこそ可能となる東京農大ガストロノミー構想である。



東京農大「ガストロノミー」始動

「食」を核にして地域活性化へ寄与



上田 智久 教授

とは残念だが、農家自身が現場に新たな価値を見出すなど得るものは多かった」と手応えを感じていた。その土地でしか味わえない「食」

は大きな魅力となる。今後、本事業「東京農大ガストロノミー」においては、本学と関わりのある地域を対象に、食を核とした、地域振興や活性化、関係人口の創出などを展開していく。

ガストロノミー

フランス語を起源とし、料理と文化のさまざまな関係を考察すること。「美食学」といった訳語にも。

活躍する卒業生

キテレッツファーム
神田 賢志
(2011年 国際農業開発学科卒業)

住宅地の一角に、野菜の無人販売所がある。そこに並ぶ野菜たちはエネルギーギッシュで、新鮮そのもの。今か今かと、買い手待っている。2020年に地元八王子で新規就農した、神田賢志さんの野菜だ。

キテレッツな人生を歩む



「キテレッツファーム」無人販売所の前で

か4年後、「農業しに、オーストラリア行かない？」と友人に誘われ、退社を決意。海を渡ってオーストラリアの農家で1年間働いた。内に秘めていた農業への思いが湧き上がって、環境保全型農業の担い手として、有機栽培を続けたいと話す神田さん。「味の評価については、わからない。お客さんの評価に任せています」と笑って答えるところからも、環境を一番に考えていることがうかがえた。無人販売所「キテレッツファーム」の野菜は夕方になるとすっかり無くなり、取材中に「この前のキュウリ美味しかったわよ」とご婦人から声を掛けられる場面も。味については、ご近所のお墨付きと言えるだろう。

有機野菜へのこだわりは環境への思いから



パッキングやラベルのデザインまで自分で行う

いろいろな経験をしてほしい。さまざまな生き方、考え方をすることで、自分の未来も変わってくる。農大には、おもしろい先輩がたくさんいます」と、神田さん。一般常識に縛られ過ぎず、柔軟に、ニューラルに、そして時に「キテレッツ(奇天烈)」に——これが在学生への、新規就農を果たした神田さんからの力強いメッセージだ。

い、いろいろな経験をしてほしい。さまざまな生き方、考え方をすることで、自分の未来も変わってくる。農大には、おもしろい先輩がたくさんいます」と、神田さん。一般常識に縛られ過ぎず、柔軟に、ニューラルに、そして時に「キテレッツ(奇天烈)」に——これが在学生への、新規就農を果たした神田さんからの力強いメッセージだ。

ラジオ番組に本学の教員・学生が順次出演

——東京FM「あぐりずむ」に来月から

東京FMで10年ほど前から放送されている農業系番組「あぐりずむ」に、東京農大の教員・学生が順次出演していくことが決まった。「光・土・水『農業』こそ、日本の宝。作るロマンと食べる喜びは日本を元気にする」をキャッチフレーズにした番組で、川瀬良子さんがパーソナリティを

務めている(番組HPより)。令和3年8月から令和4年3月までの毎週火曜日に、計35回の出演が予定されている。この8～9月の出演者とテーマの予定は下表の通り。毎回、10分間ほどの出演時間で東京農大の教育研究活動について紹介していく。

オンエア日	収録テーマ(予定)	出演者	役職
8月3日	あぐりずむpoweredby東京農業大学スタート今後の取り組みについて	江口 文陽	学長
8月10日	東京農業大学の研究と農学の世界	上岡 美保	副学長
8月17日	食農教育で社会を変えるための研究	上岡 美保	副学長
8月24日	東京農大ガストロノミー①	上田 智久	産学・地域連携センター長
8月31日	東京農大ガストロノミー②	上田 智久	産学・地域連携センター長
9月7日	食糧問題を解決へと導く「宇宙」での生育につながる新しいイネ①	山本 紘輔	准教授
9月14日	食糧問題を解決へと導く「宇宙」での生育につながる新しいイネ②	山本 紘輔	准教授
9月21日	分子の視点から追求する美味しいごはんとは?①	辻井 良政	教授
9月28日	分子の視点から追求する美味しいごはんとは?②	辻井 良政	教授



天理大学戦二回から登板し勝ち投手となった伊藤菜央さん

北海道オホーツク硬式野球部

全日本大学野球選手権 ベスト8

2大会連続17回目出場

大学野球日本一を決める、第70回全日本大学野球選手権記念大会が6月7～13日に開催され、東京農大北海道オホーツク硬式野球部がベスト8の成績を収めた。全国26連盟の春季リーグ戦を勝ち抜いた27の代表校が、明治神宮野球場と東京ドームを舞台に熱戦を繰り広げた本大会。北海道オホーツク硬式野球部は、北海道六大学野球春季リーグ戦で優勝し、2大会連続17回目の出場となった。

前回大会ベスト4に進出したため、1回戦シードで迎えた初戦の2回戦、対戦相手は阪神大学野球連盟代表の天理大学。初回、先発の林虹太さん(自然資源経営学3年)の立ち上がりは狙わ



天理大学戦サヨナラ打を放った古間木大登さん

3年)が無失点に抑え、打線の援護を待つ。六回裏に金子隼人さん(自然資源経営学2年)の適時打で、古間木大登さん(自然資源経営学4年)がサヨナラヒットを放つ。最終回に同点に追いつかれ延長へ突入。延長7～6でものしにした。

天理大学が1点を勝ち越すがその裏の攻撃で、守屋俊介さん(自然資源経営学4年)が同点の適時打を、古間木大登さん(自然資源経営学4年)がサヨナラヒットを放つ。天理大学との接戦を7～6でものしにした。



枇杷を収穫する学生たち

今年度、厚木キャンパスで新たな取り組みが始まった。「果樹園栽培学」の募集企画である。厚木キャンパス内には、梅・柿・枇杷などの果樹がおよそ100本植えられ、学生は興味のある果樹を1年間(または数カ月)、自分の木として栽培することができる。今年度の応募者は個人と団体合わせて約80人集まった。5・6月には早速、枇杷が収穫期を迎え、学生たちは持ち帰れないほどの枇杷を収穫した。果樹の栽培技術についてアドバイスできる教職

生野球連盟代表の上武大学と対戦。江口学長も応援のためスタンドに駆けつけてエールを送った。初回に2点を先制して幸先のいいスタートだったが、その裏3点を失って逆転を許す。二回以降は継投で上武大学打線の勢いを食い止めようとするも、流れを変えられずに3～11で敗退した。

新型コロナウイルスの影響で、活動に制約がある中、リーグ優勝を成し遂げ、全国大会ベスト8の結果を残した北海道オホーツク硬式野球部に、応援席からは惜しめない拍手が送られた。

厚木キャンパスで新たな取り組み

1人1本の果樹オーナーに

自分で管理・収穫して味わう

員もおり、学年学科に係らず初心者も参加可能な環境が整っている。果樹栽培に携わり実践的な管理技術を身につけると、また、大学内の緑地管理に貢献することを通して厚木キャンパスをより好きになってもらいたいという思いが込められている。自分の木として、管理し、収穫し、美味しく味わえる魅力的な企画である。

ボクシング部

小川翼さん 国際大会で銀メダル

ライトフライ級の日本代表として出場



高橋監督(右)とともに江口学長に準優勝を報告



生産環境工学科3年の小川翼さんが、日本代表として出場したコンスタンチン・コロトコフ記念国際トーナメントのライトフライ級(体重49kgまで)で準優勝し、銀メダルを獲得した。

本大会は、ロシア連邦の連戦を勝利し迎えたハバロフスク市で5月10日から6日間にわたり開催された。小川さんにとって初の国際大会となった。間合いを取りながら、相手選手のラフな攻撃をかき、得意のカウンターでポイントを重ね、5対0の判定勝利を収めた。

大会最終日となった15日の決勝は、大会主催国であるロシア代表選手との対戦になり、完全アウトで迎えた初戦の2回戦、対戦相手は阪神大学野球連盟代表の天理大学。初回、先発の林虹太さん(自然資源経営学3年)の立ち上がりは狙わ

大会最終日となった15日の決勝は、大会主催国であるロシア代表選手との対戦になり、完全アウトで迎えた初戦の2回戦、対戦相手は阪神大学野球連盟代表の天理大学。初回、先発の林虹太さん(自然資源経営学3年)の立ち上がりは狙わ

大会前には、練習中に足を怪我するアクシデントもあり、満足のいく調整ができない中でロシア入りであった。そんな状況下でも、トーナメントを勝ち抜き結果を残した小川さんについて、ボクシング部の高橋監督は、「普段からコツコツ努力を重ね、強固な精神力が備わってこそこの結果と感しており、本大会をきっかけにさらに飛躍してほしい」と語った。

エーな雰囲気での戦いとなった。経験豊かで技巧派の対戦相手に序盤から積極的な攻め続け、フットワークからのコンヒネーションでヒットさせるも、判定負け。惜しくも優勝には一歩届かず、準優勝で幕を閉じた。

帰国後、大会の結果について江口学長に報告した小川さんは、「日本代表として初めて選拔された。初回の国際大会で準優勝という結果を残せたことは、とてもいい経験になりました」と、喜びを語る一方で、「次は誰にも負けないように、これからまた精進していきたい」と次への抱負を述べた。

北海道オホーツクキャンパス 学生開発コスメ商品 つながる支援の輪



プロジェクトメンバー(左から須賀さん、佐藤さん、岡田さん、上條さん、大谷さん、長坂さん)

食香粧化学を学ぶ学生が開発したハンドクリーム「学ム」M.A.Wハンドクリー生コスメプロジェクト」ム」が、クラウドファンディングでおおよそ170万円の支援金を集めた。昨年春から始動した本プロジェクトは、新型コロナウイルス感染症によって影響を受けている北海道オホーツク地域の学生に思いが形になったものだ。北海道の道花であるハマナスの果実や、白樺の樹液を使ったハンドクリームを、化粧

品会社などの協力を得て商品化させた。コロナ禍で、打ち合わせのほとんどをオンラインで行っていたため、メンバーの意見をまとめるのに苦労したと話すのはプロジェクトリーダーの岡田ゆいさん(食香粧化学科3年)。「納得するまで何度も話し合いを重ねました。実習やアルバイトでお世話になっている農家や漁協関係の方々に使ってほしい」と語り、しっかりと保湿力はあるが、べたつかない使い心地と、ワイルドローズの



M.A.W.ハンドクリーム(M.A.W.はアイヌ語で「ハマナス」の意/1本50%)

東京2020オリンピック・パラリンピック日本代表

祝

山下 学 選手
ホッケー男子
(2011年 食料環境経済学卒業)

成松 大介 選手
ボクシング男子ライト級(リオ五輪2大会連続)
(2012年 食料環境経済学卒業)

林 晃 監督
空手 男子組手
(1983年 林学科 卒業)

工藤 俊介 選手
テコンドー男子 75kg級(上肢障害)
(2014年 短期大学部醸造学卒業 2016年 アクアバイオ学卒業)

優しい香りのハンドクリームに自信をみせる。今後、網走市役所にも寄贈される予定となっている。